
水性

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水性

【Nコード】

N9111U

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

強烈の日差しが照り返す夏の日、通い慣れた図書館で小学生だったひろかはある青年と出会う。美しい魚たちの写真が二人を引き寄せ、やがてひとつの熱が生まれる。
水底でたゆたうような優しくもどこか秘密めいた日々は、けれど決して長くは続かなかった。

ややインモラルな描写を含みますので、苦手な方はご注意ください。

夏の日

呆れるほど、真つ青な空だった。

人道雲がその陽射しを割るように、あちこち広がっている。

リゾート地の絵葉書の様な快晴だと言うのに、浜辺には私達以外誰もいない。もっとも観光地ではないし、夏とは言え平日の午後だから当然と言えば当然かもしれない。

初めてにしては大胆に、私達は制服のまま学校を抜け出していた。波は穏やかで、心地好い風がスカート裾やセーラー服の襟をはためかせている。目の前の男の子の、水飛沫が飛んで眼鏡を外そうとする仕草に、突然7年前の光景が甦った。

（そう言えば、彼もあの時眼鏡を外して）

「松井？」

波の音と、彼が私を呼ぶ声が、遠い世界のものになっていった。

『彼』と初めて出会ったのは区立の図書館で、当時小学4年生だった私は平均より小柄だったと思う。

陽射しを遮る為に下されたブラインド沿いの、大型本の並ぶ低い棚を凝視する。

写真集のコーナーで、取ろうとした本に隣の人の手が重なり、慌てて別の本を取ろうとしたら、同じことを思ったらしいその人と再度ぶつかってしまった。

その手が自分より大きな男性のものだった事が、私に怯えた顔を

させたらしい。

困った様に笑顔を作り、「ごめんね」そう言って彼は何も取らずに去っていった。

大人、と言ってもまだ若い、学生っぽい人だった。大学生くらいだろうか。

彼が去った事にホツとすると同時に、罪悪感も湧いて出た。

（謝らせちゃった…）

小さい身体を持つことは、時として相手を無意識に悪者にさせてしまう事がある。

（あのひとが悪かったわけじゃないのに…）

たまたま、手に取ろうとした本が同じだったただけだ。

抜き出そうとした本を目で探す。

それは2冊とも、熱帯や亜熱帯の魚の大判の写真集だった。

（2冊あるんだから　　）

そう思った途端、両方抜き出して彼の姿を探した。ブルーのダンガリーのシャツに色褪せたジーンズ、細身の体つきで眼鏡をかけていた。ちょうど、閲覧室を出て行く姿が目に残る。

「　あの！　」

振り向いた視線が下へ下がる。

「あ、あの、…二冊あって、両方いっぺんに借りる必要ないし、あの、だから良かったら…」

思考に言葉が追いつかず、焦りで頭の中が真っ白になっていく。初対面の見も知らない人に、私は一体何を言っているんだろう？ そんな私の動揺に反して、彼は意を解したように頷いた。

「　ああ、なるほど　」

「　…あの、だから…　」

「ありがとう。でも、もう他のを借りちゃったから、僕は君の後で構わないんだ。だから　ね？」

遠回しな拒否。

（何か、余計な事しちゃってる　　）

彼の優しい声よりも、私はその思いに捕らわれ更に動転した。

「う、ごめんなさい…！」

「謝る事じゃないよ」

勝手に思考を暴走させ自爆した私を放って置けなくなったのか、彼は私の前に屈みこんで苦笑する。私よりも、視線が少し低くなっ
た。

「君も、熱帯魚好きなの？」

唐突な話題の転換に、私は目を丸くした。

「え？」

「綺麗だもんね」

「う、うん」

穏やかな口調と答えやすい誘導展開が、私の中の焦りと自己嫌悪をさらりと拭い去った。

「この人の写真はいいよ。海外版でも出ているから、探してみるといい」

「え？」

彼の言葉の意味を理解しようと、写真集の著者の名前に目を落とす。それまで、写真集は写真だけ見るものだったから、著者の名前なんて気にした事がなかった。

「じゃあね、わざわざありがとう」

気が付けば、彼は立ち上がって小さく手を振りながら出口の方へ歩いて行く。

胸の中に、何かがことりと音を立てて転がり落ちてきた気がした。

「あ、あの！ ありがとう」

何と言って良いか分からず、とにかく胸に浮かんだ言葉を口にする。

彼はもう一度振り返ると、小さく笑って出ていった。

それが『彼』との最初の出会いだった。

私にとって、その図書館は近所である事もあり、お気に入りの場所の一つだった。明るく清潔で、蔵書も多い。座る場所も多くて、ゆっくり本の世界に沈み込むことができる、静かな空間。

そんな図書館に通う理由が、もう一つ増えていた。

彼に会いたかったのだ。

教えてもらった通り、著者の名前で蔵書を検索したら、他にも数冊の写真集が見つかった。

なるほど、外国で出版されたものらしく、タイトルや中の説明はすべて英語で書いてある。

それはやはり美しい魚たちを写したもので、驚くほど至近距離でとった不思議な魚の顔や、深い珊瑚の海に群れる色とりどりの魚の大軍、水面からの光の加減なのか幾重にも折り重なる鮮やかな色が信じられないほど幻想的な世界を繰り広げている。

私は夢中になってその人の写真集に見入っていた。

同時に、この感動を誰よりも彼に伝えなかった。

また、来るだろうか？

放課後になると私は図書館に直行し、彼の姿を探した。

子供向けの棚だけでなく、専門書や哲学書など、読む事も難しそうな普段は近寄らない棚も何度も行き来した。

とは言え、小学生ではないのだから毎日図書館に来れるほど暇ではないのだろう。今日び、小学生だって忙しい子は塾だ習い事だと忙しい。

彼はなかなか姿を見せなかった。

だから。彼の姿を見つけた時は嬉しくて飛び上がりそうになってしまった。

（あの人だ　！）

細身の背中。細い銀フレームの眼鏡。少し伸びすぎた様な、サラサラと音を立てそうな前髪。

しかし、膨れ上がった喜びは急速にしぼんでいく。

一体、何と言って声をかければよいのだろうか？

こんにちは？ 私を覚えていますか？

覚えている筈がない。たった一度すれ違っただけの子供を、覚えている可能性は限りなく低い。

私が読めない英語の書棚に向かう、彼の背中を見ながら絶望が駆け抜ける。

やっと会えたのに。ずっと、会いたかったのに。

彼を目の前にして話しかけるきっかけを持たない事が、悔しくて仕方なかった。

けれど、そんな私の視線に気付いたのか、彼は振り返っていぶかしげに私の姿を見下ろす。

視線が合い、心臓がバクバク跳ねて口から飛び出しそうだった。

「あ、あの」

彼はしばらく何かを思い出そうとするようにじっと私を見つめていたが、やがて眼鏡越しにその瞳を細めた。

「…ああ、あの時の」

嬉しくて、泣きそうになった。

「あの！ あの写真家さんのことを教えて頂いて、ありがとうございました。あの後色々探したの。どれもとても素敵だった！」

まるで急いで告げねば彼が煙となって消えてしまうかのように、私は一気に喋りだす。

そんな私に、彼は更に安心させるような優しい笑みを返した。

「そう。よかった、気に入ってくれて」

「ずっと、お礼を言いたかったんです。あの、変にじっと見ちゃってごめんなさい！」

自分のとった行動の怪しさに気付き、私は慌てて頭を下げる。はつきり言って、私のした事はストーリーキング以外のなにものでもなか

った。

そんな私が可笑しかったのか、彼はくすくす笑いながら言った。

「うちにも結構いるんだ、熱帯魚」

「え？」

「だから…あの写真集を選ぶなら、他のもきつと気に入ると思って余計なお世話だったかと後から思ったんだけど…そんなに喜んでくれて安心した」

腰を屈めて視線の高さを合わせながら、人懐こい笑顔を浮かべる彼に私の胸が更に高鳴る。

回転しない頭で必死に話題を探した。このまま、じゃあと言って別れるのは嫌だった。

「ほ、本当は本物が見られれば一番いいんだけど、うち、お父さんもお母さんも忙しいから…」

思わずそんな事を口走る。水族館はこの街にはない。昔連れて行ってもらったところは、電車を何回か乗り換えなければならなかった。

「そうなの？　じゃあ、良かったら見に来る？」

「え…？」

「あいや、うちにも結構いるんだけど…って、やっぱりいきなり知らないお兄さんについていくってのは」

自分の言葉に驚いた様に、彼は慌てて語尾を濁す。その焦った様な姿が、逆に私を安心させていた。

「何がいるの？　お兄さんの家」

「アロワナとか…カージナルテトラ、ネオンテトラ、ダブルテール・グリーン・ベタ、アフリカンランプアイ…」

彼が挙げた大半は、知らない名前だった。分かるのはネオンテトラとアロワナくらいだ。けれど羅列される知らない名前が、まるで魔法の呪文の様に私を興奮させた。

「遠いの？　お兄さん家」

「七塚の4丁目。七塚公園の北の方なんです…」

それは知らない地名ではなかった。よく行く場所でもないが、学区内で自宅からも遠くない。何より、このまま彼と別れてしまったくなかった。家まで遊びに行けると言う事は、親密度もそれだけ上がるかもしれない。何より、宝石の様な魚たちの名前が私の警戒心を和らげていた。

「……本当に、行ってもいいの？」

おずおずと切り出した私に、彼はにっこり微笑む。

「お父さんやお母さんには言わなくて平気？」

「大丈夫。時間までに帰れば、何も言われないもん。それにお仕事中はなるべく連絡しないようにしているし……」

それに…両親に断れば反対されるかもしれない。

「じゃあ…まあ、いつか」

くしゃりと崩れた笑顔には、純粹な好意しか映っていないかった。

そう言えば、と彼は身体を起こして訊ねた。

「名前、まだ聞いてなかったね」

「まつい、ひろかです」

「ひろかちゃんか、いい名前だね」

彼はもう一度目を細めてそう言った。

秘密

彼の家は、木造二階建ての洋館風のアパートだった。

白いペンキで塗られた下見張の壁や突き出た入り口が風雨に晒されて、それでも尚壮健そうなその建物は、古いと言うよりレトロなイメージを醸し出している。

入り口は道路から少し奥まった場所にあり、大きな櫨の木が両側に2本、枝を広げて影を作っている。森に入ってゆくような雰囲気は、私に隠れ家の印象を抱かせた。

私の臆した様子に気付いたのか、彼は、見かけほどボロくはないんだよ、と笑った。一人暮らしなんだ、とも言った。

空調をかけて締め切っているのか、はたまた平日の日中だから仕事に出かけているのか、他の住人の気配は全くない。

彼の部屋は1階の一番奥で、玄関は板張りの廊下を抜けたところにあった。

表札はない。

建物の入り口にあった、彼が郵便物を取り出した郵便受けにも、部屋番号の表示があるだけで住人の名前などを示す表示はほとんどなかった。他のメールボックスもほぼ同様である。今時、住人の性別や名前といった個人情報がかかる表示は出さないのが普通なのかもしれない。けれどどこか隠し事めいた印象を受けるのも確かである。

無邪気について来てしまった事に、多少の不安と後悔を覚えて不意に足がすくみそうになった。

良かったのだろうか、彼が本当にいい人だと言い切れるのだろうか。そう言えばまだ、名前も聞いていない。

彼の笑顔が不透明なものに思え始め、目の前の背中を思わず凝視する。濃紺のTシャツに、汗染みが黒っぽくできていた。左の肩に

背負ったデイパックには、図書館で借りたやはり魚の本が入っている。全部英語の、学術書の様な厚い本だった。

膨れそうになる不安を無理やり頭の隅に追いやって、私は足を進める。ほんの僅かながら、彼と彼の部屋に棲む魚達への好奇心の方が勝っていた。

「どうぞ」

彼に促されて入った部屋は、窓の全てに木製のブラインドが下ろされていて薄暗く、けれど空調が効いていてひんやりとした空気が流れていた。照りつける真夏の太陽が世界の主と化していた外と、驚くほど対照的である。

陽光を遮断して尚この部屋を明るくしていたのは、壁を埋め尽くす沢山の水槽に設置された、水槽用の青白い蛍光灯だった。

「う・わ ……」

古いアパートにしては広めの真四角な部屋の壁の垂直にあたる二面に、それぞれの魚に合わせた水槽がタイルモザイクの様に組み合わせられて並んでおり、中には色とりどり、大小様々な魚達がその身を揺らめかせていた。

魚にあわせて水草も揺れている。そのゆったりした動きは、私を幻想の世界へと誘っていった。

「すごい…」

「気に入った？」

「うん！ すつごくきれい！」

私の感嘆に、彼はいたく満足したようだった。

メダカくらいのサイズで、けれどもいろんな色をした魚の群れを指差し、私は聞いた。

「あれって、ネオンテトラだね？」

「そう、赤と青のがね。下のほうにいる赤っぽいのはカージナルテトラ、黒いラインが入ってるのがペンギンテトラ」

「ペンギン？」

「白地に黒つてのがそれっぽいからじゃないかな」

「この上のほうにいるピンクは？ 白い斑点のある…」

「それはパールグーラミイ。点々が真珠をちりばめたみたいでしょ？」

「うん、きれい」

それまで写真でしか見た事のなかったものを、間近で見るところで私はとても興奮していた。不安や後悔なんて、とっくに地球の裏側まで飛び去っていた。

次々と繰り出される質問や歓声に、彼は嫌な顔ひとつ見せず丁寧に答えてくれる。

時間だけがあっという間に過ぎていった。

「…ひろかちゃん？」

一通りの興奮が去った後、私は放心した様にその場に座り込んでいた。板張りの床と生成りのクッションが触れる足に心地いい。

「どうしたの？」

台所から麦茶の入ったコップを持って出てきた彼は、私の急な変化に少し驚いたような声を出した。

「思ってもみなかったの。あの…頭の中では知ってたんだけどね、けど…本当にこんな綺麗な生き物がいるんだなって…」

ゆっくりと、自分の中にある言葉を搜して紡ぐ。正確に、一片の齟齬もなく伝わるように。

「すごいね。本当に…うそみたい…」

一見矛盾した私の言葉に、彼は何も言わない。何も言わず、黙ってコップを私の前に差し出すと、私が麦茶を飲むのをじっと見守っていた。

コップに口をつけると、身体の中に麦茶が染み渡り、熱く火照った身体を優しく潤していく。

大きく息を吐いて見上げると、彼の目が優しく水面のように揺ら

めいていて、彼が私の言葉を正確に受け止めてくれた事がなぜかは
つきり伝わってきた。

何故だか信じられないほど、とても満ち足りた気分だった。

「今日は本当にありがとう」

「どういたしまして。満足して貰えて嬉しいよ」

「私も嬉しかった。あの、…あのね」

「何？」

しばらく躊躇ったあと、思い切って切り出す。

「また…来ちゃだめかな」

一瞬、彼の瞳に微妙な影が走る。気に触ったかと私は慌てて言い
訳の言葉を探した。

「ごめんなさい！ 図々しいかなって思ったんだけど…あの、もし
…お兄さんが嫌じゃなければって…」

「別に嫌なわけじゃないんだ。ひろかちゃんがうちの連中をそこま
で気に入ってくれて嬉しいよ」

「本当？」

「うん。ただ…」

彼はそう言っただけで瞳を宙に泳がせる。再び微妙な影を見た様な気がする
るのは気のせいだろうか。

しばらく逡巡した後、彼はようやく口を開いた。

「秘密にしてくれたら来ても良いよ」

「秘密？」

「この部屋の事、僕の事、ひろかちゃんがここに来るのを誰にも言
わないって約束できるなら、来てもいいよ」

彼の言葉の真意が分からず混乱する私に、畳み掛ける様に問いか
ける。はじめは両親に断るようにとさえ言ったのに。

「約束できる？」

「できる、けど…なんで？　なんで秘密にするの？」

「えーと、つまりね、僕はこの部屋を気に入った人にしか見せたくないんだ。ひろかちゃんはともい子だから来ても全然構わないんだけど、それ以外の人に興味を持たれて来られるのは困る。だから…僕の言おうとしてる事、わかるかな…」

「わかる…と思う」

確かに学校友達とかに話せば、興味をもって一緒に行きたいと言いだすかもしれない。人数が多ければそれこそこの魚たちの特別な世界を壊しかねないだろう。両親は…やはり何かを心配して止めるかもしれない。それも嫌だ。

私の曖昧な返事に、彼は咎めるでもなく静観している。

分かる様な気はしたが、小さな不安が残ったのも事実だった。それでも、大きな誘惑には抗えなかった。彼と、彼の魚たちと。

「お兄さんとひろかだけの秘密だね？」

「そう、お父さんやお母さんにも…できれば言わないでほしい。約束できる？」

彼が望むのは秘密を共有する事。

「言わない。大丈夫。ひろかん家、お父さんもお母さんも仕事で遅いし、ばれないように出来ると思う。…絶対、秘密にする」

彼の真剣な瞳が眼鏡の奥から私を覗き込み、緊張した空気が流れる。不意に、私は彼が綺麗な顔立ちをしている事に気が付いた。

ふと、怖いくらいだったまなざしが溶けて、優しくなる。

「いい子だね、ひろかちゃん」

脳の一部が溶けて、何か柔かいものに変わる様な錯覚。

それが共犯者として受け入れられた、彼からの言葉だった。

私は大きな秘密を抱えて家路についたのだった。

さかなたち

いつしか、その部屋は私のお気に入り場所になった。

秘密という言葉の響きは、甘い誘惑を伴って私をその部屋へと向かわせる。

実際、そこはとても綺麗で居心地のいい場所だった。ひしめく水槽の魚達が幻想的な雰囲気をかもしだしているのは当然ながら、その水槽の配置が部屋に圧迫感や違和感を与えない事は、彼のセンスの良さを窺わせる。すべてがあるべき場所にある、といった感じは私をとて落ち着かせるものだった。

やがて、夏休みに入ると私は彼の部屋に入り浸るようになった。いつ私が訪れても、彼の態度は変わる事無く穏やかで優しくかった。彼の部屋へ行くと、何をするともなく魚たちを眺め、何気ない話をし、時々水槽の掃除等を手伝って過ごす。

彼の話聞くのは大好きだった。

彼は魚に関しては驚くほど博識で、その内容は魚たちの名前の由来から始まって、原産地の話、学術的な生態系、果てはその魚にまつわる民間伝承にまで及んだ。

「この『過背金竜』かせきんりゅうは、アジアアロワナの仲間だね…」

部屋の中にいる、ひときわ大きな銀色の魚を指差して、彼は言った。

「アロワナって古代魚の一種だね？」

「そう、良く覚えてたね。こいつには古い言い伝えがあって、昔、天の竜が人間の娘を娶る時こいつを迎えにやっただって。娘はこの魚の背に乗って天へ嫁いだ…」

耳に心地良い彼の声が響く。

「でもこのこ、80センチくらいしかないよ？」

バカ正直に、私は人が載れる大きさでない事を指摘する。当たり前

前だ。只の伝承なんだからと彼は言いう事も出来たが、そうは言わなかった。

「うん、昔話だからね。娘が乗ったのはもっと大きかったんだと思う」

「ふうん…」

目の前の金の魚が、娘を乗せて天に昇るところを想像してみる。ゆるゆると背びれや尾ひれをはためかせて空を泳ぐその姿は、とても綺麗だった。

「そろそろこいつの餌の時間なんだけど…」

「うん」

「一緒に見てて平気？」

「？ 何で？」

「こいつ、生餌いきえだよ？」

いきえ？

一瞬、彼が何を言ったのか分からなかった。

「こいつ、生きた金魚を食べるんだ。だから…」

彼はそう言くと少し意地悪な笑みを浮かべた。

「見ないほうがいいと思うよ？」

なるほど、そう言う事か。生きた餌を食べさせる魚がいる事は知っていた。もちろん実際に見た事はなかったけど。

「…平気だよ。ひろかも見る」

少しムキになって私は言った。

彼は少し意外そうな顔をしたが、止めようとしなかった。

餌用の金魚を隣の水槽から網で掬うと、そのままアロワナの水槽へ投げ入れる。慌てて逃げる金魚の倍の速さでアロワナは食いつき、あっという間に平らげた。

私は目をそらす事無く、それをじっと見ていた。

「意外」

「何が？」

「女の子って、こういうの苦手かと思ってた」

「…見て気持ちのいいものではないと思うんだけど…」

「うん？」

「魚だつて食べないと死んじゃうんでしょう？」

「そうだね」

「だったら平気。当たり前のことだもの」

「……えらいね、ひろかちゃんは」

彼の言葉にびっくりして振り返る。

「偉いなんて、どうして？ 初めて言われたよ」

「そうなの？」

彼は意外そうに答えた。

「変わってる、とはよく言われるけど…」

「ああ、そうかもね」

彼は納得したように頷く。その言い方は言葉通りの意味しがなく、決して他意を感じさせものだったので、私は落ち着いて話を続ける事が出来た。

「学校の友達とか：お母さん達にもよく言われるよ。『お前は変わった子だ』って。別に嫌な言い方じゃないからいいんだけどね。『

何を考えているのかよく分からない』とか…」

「そう…」

少し同情的な色合いがその瞳に混ざるのを見て、私は些か慌てて言い繕う。

「でもね、便利な事もあるの。昔から一人で遊ぶのが多い子供だったから、…ここに来ている事もばれにくいと思うの」

「……………」

「便利でしょう？」

いたずらっぽく笑った私の頭を、彼の大きな手がくしゃりと撫でた。

「ひろかちゃんはいいい子だよ。人より感受性が強くて異質な印象を与えるのかもしれないけど…。それに、思ったより早熟なのかもしれない」

れない」

「……………」

『早熟』の意味がよく分からない。それに小柄な外見からか、私は実年齢より下に見られることが多かった。

「でも、優しいよね」

私の困惑に気付かず、彼は言葉を続ける。

「何でそう思うの？」

彼の言葉が理解できず、私は少し混乱して訊ねた。

「ひろかちゃんは何も僕のこと、何も聞かないでしょ」

「それは」

私は口ごもった。

「何となく、聞かないほうがいいかなって……」

「うん。でも、どう考えたって変わってるのは僕の方が上でしょう。だって、思わない？ 一日中部屋にいて魚相手に過ごしている。おまけに小学生の女の子を連れ込んで、秘密を共有させている。ただのひきこもりにしたって、他人が聞いたら絶対怪しいよね。一歩間違えれば犯罪者扱いだ」

そう言って、彼は悪戯っぽく笑った。

「それは」

正直、疑問に思わないわけではなかった。彼が何者なのか。たとえば何で生計を立てているのか。怖くて聞けなかったただけだ。聞いたならこの部屋に来られなくなる気がした。

彼が言っている意味は分かる。

小学生の女の子が大人と呼ばれる歳の青年と密会している事は、一般的に照らし合わせれば充分危険を想起させる行為だと言う事は、いくら私が幼くても情報として知っていた。

だから尚更、彼の事を何も知らない方が、無邪気な子供の振りをして目をつぶっていられると思ったのかもしれない。

「聞いても…良かったの？」

「　　どうかな」

彼は曖昧に笑った。

「外で…働いたりしてないよね」

たとえば夜のコンビニとか、自分が来ない時間に働いている可能性もあっただろうが、どうしてもそれは彼のイメージに繋がらないどこか浮世離れた雰囲気のせいだろうか。

家族の気配すら全く感じさせなかった。まさかない訳ではないだろうが、私の頭の中にそのイメージがうまく湧かない。

「バイトでね、専門誌の下訳をしてる」

「したやく？」

「えーと、外国の論文とかを雑誌に載せる時に、日本語に直すでしょう。その翻訳の下地作り、みたいなものかな」

「それで…英語の本とかよくみてたんだ」

部屋の隅に積んである本も、よく見れば半分は外国語だった。

「専門用語も多いからね。訳す時に語彙や知識が必要になる。大体はウチの大学の本で間に合うけど…たまに検索して蔵書があると、町の図書館も利用させてもらってる」

彼の言葉は、一生懸命分かりやすく教えてくれているものの、小生には少し難しすぎた。

ウチの大学、と言うと、つまり…

「大学生なの？」

「そうだね。…元々は」

「今は？」

「休学して療養中なんだ。この意味わかる？」

私は少し考えてから肯いた。

「どこが悪いの？」

「…ここがね」

そう言って、親指で心臓の辺りを指差した。

「心が、病んでる」

「……うそお」

私は驚いて、彼を凝視した。

彼は微笑んだまま、私に問いかける。

「ひろかちゃん、僕の事怖くない？」

笑みを含んだその表情とは裏腹の、どこか儚げな匂いを私は敏感に嗅ぎ取っていた。今彼を、突き放しちゃいけない。何もかもが曖昧な中で、それだけは確信できる。

「よく、わかんない。よくわかんないけど、でも……」

私は泣きそうになった。けれど、泣かなかった。

彼の胸に額を押し付けて目を閉じる。

「早く、良くなると良いね」

彼の心臓の音が聞こえた。

とくんとくんとくん……

絶え間なく繰り返される命を生かすためのポンプ音。それは水槽の濾過を動かすための音にも似て、どこか無機質な響きに感じる。

なぜ病んでしまったのかとか、その理由は聞かなかった。聞かないほうがいい氣もしたし、聞く必要もないと思った。

たとえそれがどんな病気だったとしても、彼は私にとってまともだったし、それで充分だったのだ。

私の動きを予想していなかったらしく、彼は途方に暮れた様に動かない。しかし、やがて私の肩に腕を回すと、私の身体をしっかりと抱きしめる。そして「ありがとう」と、囁くように呟いた。

その日の別れ際、私は彼に尋ねた。

「また、ここに来て構わない？」

私が不用意に近付いてしまった事で、彼が身を翻してしまわないかと不安になったのだ。

彼は少し戸惑う様な口調で私に聞き返した。

「ひろかちゃん、この部屋が好き？」

「うん」

「僕の事は？」

「お兄さんも好き」

「本当に？」

「うん」

「本当に本当？」

子供のような彼の言い様に、少し可笑しくなる。これでは彼が子供のようだ。

「…だって綺麗なもの。この部屋も、お兄さんも。嘘なんかつかないよ」

「そう…」

彼は軽いため息を吐くと、いつもよりはにかんだ様な微笑みでこう言った。

「僕も、ひろかちゃんが来てくれると嬉しいよ」

水の底

その日を境に、私達は急速に親密さを増していった。彼への呼びかけも『お兄さん』から名前へと変わる。

「七つの青と書いて、ななおと読むんだ」

初めの頃に訊いていた、それが彼の名前だった。

七青は万が一の不在の時の為に、鍵の隠し場所を教えてくれた。私はいつでも彼の部屋に入れるようになった。もつとも彼が部屋にいない時など殆どなかったのだが。

そして、彼の部屋の中での私の定位置は、彼の膝の上になった。

他愛ない話が尽きると、彼は私を膝の上に乗せ、私のうなじに顔をうずめたり、髪の毛を撫でたりする。私はくすぐったがつて身を擦ったが、彼の膝の上から逃げる事はなかった。そこは、私にとって今まで以上に居心地のいい場所だったのだ。

彼は、小さい頃から鍵っ子で聞き分けの良い子供だった私が、初めて甘えた他人だった。

その日は珍しく雨が降っていた。ねっとり絡みつく様な蒸した空気の中を、私は泳ぐようにしてやってきていた。部屋に入った途端、部屋の中は相変わらず涼しくて気持ちいい。

傘の水けをきって、私は魚たちの楽園へと滑りこんだ。

雨の音がいつにも増して、私たちを外界から遮断していく。

「この部屋って、海の底みたい」

七青の膝に頭を乗せて、私はそう呟いた。

「海？」

「うん。青い魚が多いせいかなあ。静かで、深い、海の底」

「ほとんど淡水魚なのに？」

そう言って彼はくすくす笑う。

「やっぱり海だよ。だって川みたいに流れてないもの」

それ以上に、彼の名前が海を連想させていたのかもしれない。七つの海。七つの青。そう言えば、教えてもらった写真集のタイトルもそんな名前じゃなかっただろうか。

『Seven Blue』

「なるほど」

七青はそう答えながら、私の髪を撫で続けた。心地よい手の動きが、とろりと眠気を誘っていく。

「ずうつと…、こうしていられるといいのになあ」

「ひろか…？」

「こんな風に、青い青い海の底で、魚みたいに漂っていられたらいいのに」

それは何の気なしに漏れた、邪気のない言葉だった。

「そんな事、言っちゃ駄目だよ」

けれど静かな、と言うよりどこか感情を抑えた口調で彼は言い放った。珍しく強い言い方に、私はびっくりして聞き返す。

「どうして？」

「僕がいけない人になっちゃうから」

「いけない人？」

「いけない事をする人」

そう言った七青の瞳は、眼鏡の奥で妖しく揺らめいた。

「七青は、いけない人になんかなんないよ」

私は身を起こして怒った様に言い返す。

「少なくとも…ひろかが嫌がる事はしないもん」

「…そうだね」

幼い反駁に相槌を打ちながら、彼は眼鏡を外して私の顔をじっと見つめた。肩に置かれた手が微熱を帯びる。言葉のシーソーがいつの間に傾いたのか、私は気付かなかった。

「でも、嫌がらない事ならしてもいいのかな」

「え…？」

「ひろか、僕は病気だからいけない人にもなれるんだよ」

そう言つと、もう片方の手を私の頬にあて、ゆつくりと顔を近付ける。予期せぬ彼の行動に、私は金縛りにあつたように動けなくなつた。彼の唇が触れた時、身体の芯が震えるのを感じたが、それが恐怖からなのか、それとも悦びからなのかはよく分からなかった。

彼の肩越しに水槽の『金竜』と目が合った気がする。

そのまま、私の思考はゆつくりと停止し、深い水底へと沈んでいった。

深く青い海の底に、奇妙な熱が立ち上る。

七青はゆつくりと顔を離すと、表情の読めない顔で問いかけた。

「…嫌だつた？」

数センチしか離れていない彼の顔をまともに見ることができずに、私は顔を伏せてしまう。何とか沈みこんだ思考を浮上させ、首を横に振つた。

「…びつくり、したけど」

「うん…」

「…嫌じゃ、ないよ」

「うん」

それは思考の結果というよりも、暗い、本能に近い部分だつたと思つた。

実際、私は彼がしようとしていた事に気付かないほど幼くはなかったが、なぜか拒絶しようとも思わなかった。もし、私が拒否していたら、彼は私を解放していただろう。

（いけないことなのかな、やっぱり）

善悪の基準がばやけてはつきりしないのは、私が子供だからだろうか。彼にはちゃんと分かっているのだろうか。私の中の思考も五感も現実味を失い、すべてあやふやだった。まるで、水底にいるか

の様に、輪郭がぼやけていた。

「ひろか」

七青の声に、私は顔を上げる。

「僕の事が、好き？」

その問いには「はつきりと答えられると思った。」

「好き、だよ」

何故か声が掠れてしまう。彼は底の見えない不思議な瞳をまっすぐ私に向けて言った。

「僕から逃げていいよ」

私は逃げなかった。

七青の顔が再び近付いた時、私は大人しく目を閉じた。心の奥底にある水面に、波紋が広がっていくのを感じる。

海の底は静かで、色とりどりの魚たちだけが私達を黙って見ていた。

その後も、私は七青の部屋に通い続けた。ただ、心の奥底に後ろめたさが加わり、私を更に用心深くさせる。『秘密』である事が、私の唯一の救いになっていった。

誰にも知られちゃいけない。

分かっていたのはそれだけだ。

青い海の底で、私は七青に抱かれて眠るようになった。

彼は私の肌に触れたが、私が嫌がるような事は決してしなかった。綺麗な魚を眺めるように、私は彼を観察する。

細くて長い指、繊細そうな顎の輪郭、癖のある伸びすぎた前髪が額に落ちる。この部屋にも似た、深い海のような瞳は、時折臆病そうな優しさを覗かせ、やがて沈んでいった。

現実との幻想の境が消えたこの部屋で、私はずっとまどろんでいたかった。

私は、彼が好きだった。

楽園の罅

「だから！ その件に関しては一切関知しないと申し上げたでしょう！？」

廊下に人影がないのを確認しつつ、いつものように彼の部屋に向かった私は、玄関の中から彼が珍しく激昂する声を聞いて立ちすくむ。

中に、誰がいるのだろうか。

今まで人が訪ねてきた事は一度もない。奥まった入り口が分かりにくいせいだろうか、セールスや新聞の勧誘さえ来なかった。

ドアを開けようかどうか、ノブを見つめながら迷う。もし中に人がいたら、私は自分のことを何と自己紹介すればいいのだろうか？ 友達？ 親戚の子？

今日は帰ろう、そう決めて身を翻した時、中からドアが開いてスーッ姿の女の人が出てきた。

「また改めて参りますから」

「来なくていい！」

言い合うようにしながら出てきた彼女は、私の姿を認めていぶかしげな顔をする。しかしその興味はあっさり消え、彼女は私を追い越すとかつかつとヒールの音を高く響かせて、建物の出口へと走っていった。

唐突に訪れた静寂に、私は呆然として立ち竦む。

「高橋さん、これ！」

A4サイズくらいの茶封筒を手に、七青が顔を出し、私の姿を認めた。

「ひろか」

「あの、…今日は帰ったほうが…」

「どうして？ ちょうどよかった。客も帰ったところだし」

七青は先ほどの怒声などなかった様に、いつものおだやかな笑み

を浮かべる。

「手土産につけて持ってこられたプリンが山ほどあるんだ。食べきれないから手伝って」

あまり無理強いをしない彼にしては少し強引な誘いだった。その瞳はどこか縋る様にも見えて断れなくなる。

「プリンは嫌い？」

「…ううん、好き」

私はおとなしく彼について部屋の中へと入っていった。

コンビニやスーパーで売っているのと違い、綺麗なガラスの器に入った高級そうなプリンは、カaramelソースがほろ苦い。

「ごめん、無理に引き止めて…」

スプーンと一緒にそれを差し出しながら、自分は食べずに七青は壁にもたれて膝を抱く。

「美味しいよ？ 七青は食べないの？」

「うん……」

歯切れの悪い喋り方は、彼を実際の年齢より幼く見せる。まるで私より年下の男の子のようだった。

私は黄色くて柔らかいひとかけらを、スプーンに掬って彼の口元に運んだ。

彼はされるがまま、その塊りを口の中に含んで飲み込む。

私はもう一度プリンを口元に運ぶ。彼はもう一口飲み込んで、柔らかに微笑んだ。

「美味しい」

「よかった」

どこか弱々しい笑顔に、それでもホッとして肩の力が抜けていくのを感じた。

「ひろか」

「何？」

「ありがとう」

「……なんで？」

元々は彼のプリンだ。お礼を言われる様なことはない。けれどその事ではなかったらしい。

「君がいてくれてよかった」

「………」

本当に病人のような彼の傷付いた気配に、胸が詰まって何も言えなくなる。

「こっちに来てくれる？」

既に彼の目の前にいる。どうすればよいのかわからずプリンをお盆の上に置いた私を、彼は無言で抱き寄せる。

気が付けば彼の腕の中にいた。

胸に当たる耳に、彼の少し早い鼓動が響く。

「……だいじょうぶ？」

できるだけ驚かさないように、小さい声で囁く。彼は「うん」とやはり蚊の鳴くような声で答えた。

「ごめん………」

抱きしめられた頭の上で、泣きそうな声が聞こえる。

「なんで？」

バカの一つ覚えみたいに同じ言葉を繰り返す。 なんで謝る

の？

「……キスしていい？」

おかしな七青。今まで訊いた事なんかないのに。訊かれたことが恥ずかしくて、つい声が小さくなる。

「いいよ」

顎が持ち上げられ、彼の唇が降りてきた。

熱が触れる。

薄い唇が私のそれに重なり、ついばむように何度も擦り合わされる。

やがて、息ができずに苦しくなって、開いた私のそこに彼の舌が

潜りこんだ。

「！」

ほろ苦いカaramel味の濡れた粘膜が歯をなぞり、私の舌を捕らえる。

それまでの触れるだけのキスしか知らなかった私は、初めて知る生々しい感触に怯え、溺れた。

思わず逃げようとしたが、小さな体は彼の腕にしっかりと抑え込まれて動かない。

怖い。

初めてそう思った。

「~~~~~っ！」

彼の胸の上で、我知らず握りこんだ拳に力が入る。

が、ある一点で体の芯がびくりと震え、全身の力が抜けていった。荒い息を弾ませながら、彼の唇がゆっくり離れていく。私は背骨を失くしたかのようにぐったりと彼にもたれかかった。

「ひろか……」

くぐもった七青の声が聞こえる。けれど私にはまだ返事をする余裕がない。自分の体の変化に理解が追い付かない。

「ごめん……」

やはり泣きそうにかすれた声が頭上で響く。

何で謝るの？ 七青はちゃんと断ったし、私は拒絶しなかった。

それだけの事だ。 それだけの事の筈だ。それなのに、どうして？

そのキスの本当の意味を知るほど、さすがに私は大人ではなかった。

今なら分かるけど、あの頃には分からなかった。

けれど、だからこそ私は彼の傍にいられたのかもしれないと思う。

「七青……」

まだ力の入らぬ身体で、声を絞り出す。

「何？」

「さっきの人……」

「……ああ、弁護士さん」

弁護士？

問う様に見上げた瞳に気付いたのだろう。彼は小さく苦笑しながら説明してくれる。

「僕の……父親だった人の使い。たまに思い出したようにやってくるんだ。父は……とつくに母と離婚して、もう別の家族と幸せに暮らしてるから、放っておいてくれていいんだけどね」

「……おかあさんは？」

「死んだ。からもういない」

彼の声は淡々としていて、哀しそうでも辛そうでもなかったから、それがよけいに悲しかった。

私は両手を伸ばして彼のシャツをぎゅっとつかむ。

「それで……病気になっちゃったの……？」

「違うよ、それは関係ないんだ。単に僕が」

言いかけて、言葉が止まる。どこまで話してよいものか迷っているのだろう。しかし結局彼は、詳しい事は何一つ話してくれなかった。

「単に僕が誰とも会いたくなくて、ひとりになりたかっただけ。ひるか、君と会うまではね」

「………そう」

つまり……病気と言うのは比喩的表現なのだろう。けれど、彼の内側には暗闇の形をした激しい奔流があって、彼を傷付けたり苦しめたりしているのだ。それだけは何となく分かった。

だから、彼の言葉を喜んでいいのか悲しんでいいのかよく分からない。

「七青」

何を言っ てよいか分からず、名前だけを呼んでみる。

「ん？」

既に彼はいつも通りだった。いつもの穏やかで優しい声。少し安心して、私は彼の胸の中で丸くなる。

「だいじょうぶ？」

結局それしか言えない自分が情けなかった。

「うん」

彼の大きな手が私の頭を撫でている。

彼の傍にいたかった。

けれど

胸の奥に、彼の対する小さな恐怖が生まれたのも、この時からだった。

私たち以外誰もいなかったこの楽園に、突然現れたその闖入者の投げた小石は、水面に大きな波紋を広げ、やがて水底へと沈んでいったのだった。

楽園の罅（後書き）

罅Ⅱ ひび

沈む思い

秘密、と言う言葉が甘さよりも重苦しさを伴う様になったのはこの頃からだ。

私と彼の関係は誰にも知られちゃいけない、その思いが日ごとに強くなる。

七青は変わらず穏やかで優しくかったが、私の心の一部が怯えている事に気付いているようだった。

「ひろかは…もうここには来ない方がいいんじゃないかな」

咎めるでもなく、諭すでもなく彼は淡々と言った。一番大きな水槽の中のアロワナが、ゆらりと身を翻して水面を揺らす。

「…どうして？」

私は魚を見る振りをしながら、彼に背を向けて言った。

そうしたいとも思っていたし、そうしたくないとも思っていた。

「あまり楽しそうじゃないから」

責める口調にならないよう、精一杯優しい声で彼が事実を述べる。

「そんな事ないもん」

私は少し拗ねる口調になった。追い出されるようにして出て行くのは嫌だった。

「そう？」

彼は私を責めない。

「それならいいんだけど」

「……………」

好きと言う感情は御しが難い。彼がもつと、束縛するように私を求めてくれたら良かったのに。そうすればそれを言い訳にして、ここに通い続ける事ができたのに。

選択肢を渡される事で、自由が利かなくなる事を私はこの時初め

て知った。

ここにいて欲しいと言って欲しかった。

秘密を共有して、立った二人きりの楽園に住み続けていたかったけれど、それが不可能な事を誰より知っていたのも彼だった。

「ひろかは…ここにいたら邪魔？」

「そんな事はないよ」

「ひろかの事…嫌いになった？」

「…どうして？」

「だって…」

それ以上言えなくなる。

これでは駄々を捏ねている子供そのものだ。

でも言葉の続きを口にするには、闇に一步踏み出す事になる気がして勇気が出なかった。

どうしてあれ以来…、キスしなくなったの？

言えばしてくれたのかもしれない。恐怖の全くない、優しいだけのキスを。

けれど、結局それは嘘を重ねる事にしかない気がして、私は言い出せなかった。

その代わり、彼の膝の間にもぐりこんで、胸に凭れて丸くなる。

猫のように。小さな子供がただ無邪気に甘えるように。

肉付きの薄い手が、私の髪を撫でる。

「ごめん……」

聞こえるかどうか分からないくらい小さな声で、彼が囁く。

私は目を閉じて眠った振りをした。

彼がどうして謝るのかなんて分からなかったし知りたくもなかった。

「…眠ったのかい？」

水底に沈んでいく。私達の熱は溶けて、波間に漂って消えてしま
う。

それほどまでに儚くて脆い想いだった。

意識がは沈み、寝息を立て始めた私に、七青はやはり掠れるよう
な小声で呟いた。

「君を…好きになるつもりなんてなかったんだ」

幻のように…それは哀しく響く声だった。

終わりの日は突然だった。

「警察がね、捜してはいるらしいのよ」

太陽が容赦なく照りつけるアスファルトの交差点で、主婦らしき
女性が数人、信号を待ちながら話している。横にいた小さな私の姿
は目に入っていない様だった。

「ほら、最近多いじゃない？ 小さな女の子に悪戯したりとか…」

「ああ、それ。七塚の方じゃ連れ込まれた子もいるって話よ？」

「本当に？ やあねえ…、ちゃんと取り締まってもらわなきゃ。危
ないったら…」

彼女達の声が徐々に遠くなっていく。自分の姿が殺人的な光で織
り成される、白い闇へ溶けていく気がした。

耳の奥がガンガン鳴っている気がして、信号が青になるのを待た
ずに、もと来た道を引き返す。走り出した私に目を留めるものはい

なかった。

自分の部屋に駆け込み、鍵を閉めてベッドの中に蹲る。息が切れ何にも考えられず、ただ、さっきの言葉だけがぐるぐる回り続けた。

（七塚の方じゃ　　）

（警察がね　　）

目の前が暗くなり、頭の中がじんじんと痺れる。

（誰を、探しているって？）

私は恐怖に捕われ、秘密の崩壊に怯えた。

七青じゃない。

七青であるはずがない。

彼はずっと私と一緒にだった。他の子連れ込んだりできる筈がない。

けれど…それを証明出来る人がどこにいる？

もし、誰かに私の姿を見られていて、怪しまれて通報されたりしたら？

例えば、あの日来た弁護士の女性が、警察に何か言ったら？

罪を、犯したわけではない。

けれど何もなかった訳でもない。

もし警察に訊かれたら何て答えればいい？

両親にその事が知られたら……七青はどうなってしまふのだろう。そして私は　　？

その日から、ぱったり彼の部屋へは行かなくなった。お互いのケータイや電話番号も交換していない。けれど、七青が警察に捕まる夢を見、私のところに警察が来ないかと怯えた。来訪の途絶えた私

を、彼がどう思っているのか気にならないではなかったが、私が彼との秘密を守る方法は、あの部屋へ行かない事しか思いつかなかった。

彼を守りたかったと言うのも嘘ではない。

けれど、それ以上に怖かったのは自分が傷付く事だった。

彼は悪くない。

でも私も悪くない。

誰にもあの部屋に触れられたくないと言った彼。

そこにたった一人、入る事を許された嬉しさは、今となっては恐怖の源でしかなかった。

私は 自らの罪悪感と共に、彼との樂園を自らの内に封印したのだった。

しばらくして、私の中の封印が深い奥底に沈もうとしていた頃、七塚の隣町で知らない男が強制わいせつ罪で捕まるという記事が、新聞に小さく載っていた。

けれど、やはり私は彼のところに行かなかった。私は自分の中の何かが壊れてしまった事に気付いていた。一度私を縛った恐怖は、あの部屋に行っても決して消える事はないだろう。

（もう、来ない方がいいよ）

優しい彼の声は、自分にとって都合のいい残像でしかない事は分かっている。

けれど、彼が私を許すだろうことも分かっていた。

中学生に上がる頃、両親が郊外にマイホームを買ったのを機に、生まれてからずっと住んでいた賃貸マンションを引っ越す事になる。拭れた闇に覆われた不可視の記憶は、少しずつ一番深いところへと沈んでいったのだった。

（やっぱり変わってるよなあ…）

波の音を背にしなから、目の前の男の子をぼんやりと見て、ふとそう思う。

朔原隆志は高校に入ってからクラスのメイトで、ちょっとした異端児だった。変わり者と言われた私が思うのだから、相当なものだと思う。

亡羊とした外見と、それに似合わぬ突発的な行動は、度々周囲を驚かせていた。それでも彼が周囲から浮かなかったのは、彼に人の話を聞く誠実さとムードメーカー的な支配力があつたからに他ならない。

海が見たいな、と呟いた私に、そのまま午後の授業を放棄させたのも、実は彼である。

彼は私がキスをした二人目の人だった。

「ねえ、ほら。小さな魚が泳いでる」

靴も靴下もとうに脱ぎ捨てて、波打ち際に屈みこんでいた私の横で、同じく屈みこんだ彼は水飛沫の洗礼を受ける羽目になった。

「松井、やったな…！」

悪戯の成功に笑い出す私に、彼は負けじとやり返す。

真っ白な入道雲の下、しばらく無邪気な攻防戦が続いた。

「うわー、制服びしょびしょだ」

「お互い様。この陽気ならすぐ乾くだろ？」

「あはは、そうだね」

濡れた前髪を掻き上げ、水浸しの眼鏡を外そうとする朔原の仕草に、突然記憶がすごい勢いで逆行する。忘れていた、いや、忘れたふりをして封じ込めた記憶の残像が、奇妙な錯覚と共に甦る。

（青い、青い海の底、彼はあの眼鏡を外して　　）

「松井？」

急な私の変化を鋭く読み取った朔腹が、怪訝そうな顔で私の顔を覗き込んだ。

「また思考がどっか飛んじやったか？」

いつもの私の性癖を知っている朔腹は、その顔に微苦笑を浮かべる。

彼が時折見せる、この世の秘密を全て知っているかの様な瞳が、私を現実に取り戻した。

「朔原……」

「ん？」

「……例えばね、ものすごく好きだったいけない事を、忘れられないのは不健全？　それとも忘れてしまう方が罪悪？」

数秒の沈黙が流れる。

「……何それ。新しい命題か何か？」

不意に可笑しくなって目を伏せた。

「うつん。ただの、たわ言」

僅かに胸の痛みが生じる可笑しさに、私はそのまま朔原に背を向けて歩き出した。

朔原は心得ていて、ちゃんと追って来ない。泣きたい様な気もしたが、泣かなかった。

朔原が好きだな、と思うと同時に、奇妙な罪悪感で覆い隠されたもうひとつの同じ感情が明瞭にあらわれる。

記憶は時が風化させてくれると思っていた。全てが錯覚だったと思いたかった。けれど

「好き、だった」

口に出して呟いた時、やっと自分の中の単純な真実にたどり着い

た気がした。

哀しい目をした、私の初めての恋人。彼といた樂園。

たぶん、誰にも、朔原にさえ言わないであろうその真実に、私は少し放心して、残りの言葉を空に放り投げた。

「　　幸せ、だったなあ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9111u/>

水性

2011年8月6日12時33分発行